

辺を多くは上方の温帯ステップや高山草原に、東方の低地とは湿潤なセーハ地帯などに
くぎられて全く谷毎に孤立しており、アンデス高地のプレインカの古文明の通路ないし
は展開地（たとえば東大で発掘したコトシ (Kotosh) の遺蹟は *Espostoa* の林に囲まれた
河畔の丘陵上にある！）として海岸地方の本帯および半砂漠との関連が重要であるが、そ
れよりも各河谷の隔離による独立が細かな種形成の具体的な場として恰好の研究資料で
あるようにみえた。サボテンの細かい分類はしばしば個体変異の中に足をつっこんでい
るが、こうした環境から再検討がされるときとすっきりするであろう。

これらの谷の中ではマロヨシ河の中流 *Bagua* を中心として幅 100 km にわたって展
開するものは、最も熱帯的の典型であって、ここでは柱状サボテンと *Capparis* とが密
林をなしその間に葉を持つサボテン *Peireskia* が点在して独特の景観を呈していた。や
や高所のものとしては、その上流にいったん湿潤な地帯をへだててさらに南東から北西
へ 350 km も続く *Balsas* を中心とした地帯が著しいが、上述のコトシ遺蹟の所在地す
なわちワヤガ河のワヌコ盆地のそれもまた狭いが著しいものである（長さ約 40 km）。
これらの山中の本帯では上限もまた高くなり 3000 m に及ぶ。こういう高所でも風向き
などを考慮すれば屋敷内に露地でパイアの栽植が可能であることを実見したが、一般に
太平洋に開いた河谷の狭い平野で緑色に見える所はほとんどこの地帯といってよい。こ
の緑はその大部分がアンデスの雪解け水を利用した用水によるものであって、大体にお
いてサトウキビの栽培が採算がとれる程度に植えられるのである。（つづく）

□日本菌学会会報草野会長米寿記念号 (Transaction of the mycological society of
Japan, Jubilee volume of President Dr. S. Kusano. 1962) pp. 154 草野俊助博
士の米寿記念号。36 篇の論文の外に先生の思い出などをのせたもので Karling や
Sparrow など海外からの論文ものっている。印刷もよいし内容も充実していて我が国の
菌学の草分けとしての先生をお祝いするにふさわしいものであったが、これの出版とほ
んど前後して先生が急逝されたのは痛恨事であった。（前川文夫）

□ボールド (西田誠訳)：植物の世界 pp. 142 ¥ 380 岩波書店 (1962) これは米国の
Prentice-Hall 社から出た Foundations of Modern Biology Series 11 冊中の 9 冊を岩
波が現代生物学入門としてまとめて訳出した内の 1 冊である。これは新らしいタイプの
教科書である。分類学のように見掛けはひどく古いものでって、新しく理解させるよ
うに書くことは容易ではない。著者の H. G. Bold はテキサス大学で土壤藻類を専攻す
るが、すでに Morphology of plants (1957) の好書もある人である。全体を 10 章にわ
け、序論、藻類、菌類、蘚類と苔類という風にすすめて被子植物まで追い上げ、最後に
総括をする。一見簡単すぎるようだが分類ということの意味がよく理解できるように書
いている。双書の第 6 編 [ハンソン (八杉竜一訳) 動物の分類と進化] とを併読すると
一層よい。（前川文夫）